平成２４年１２月９日

平成２５年度メディカル・カレッジ青照館（理学療法・作業療法・言語聴覚療法）学科

高校推薦入試Ｃ日程入学試験〈小論文〉

次の記事を読み、感想を述べなさい。また、「やる気を引き出す」いろいろな工夫を提案できるセラピストとなるためには、どんなことが必要だと思いますか。あなたの考えを書きなさい。（８００字以内）

「してあげる」という介護サービスではなく、高齢者自らの「できる」という力の維持・回復を目指そう―。こんな考え方の通所介護事業所が昨年、熊本市内に相次いで登場した。それぞれ「施設内通貨」を取り入れ、高齢者が主体的に取り組むデイサービスを展開している。

昨年２月、同市日吉にオープンした「ケアサポートメロン」。元田真一所長（43）が重視するのは「ミニセルフ」、自分でできることは自分で、という考え方だ。

介護現場では、歩ける人も車いすに乗せたり、テキパキと入浴を済ませようと適度に介助したりするなど、高齢者の能力を抑えてしまうことがある。高齢者自身も、老いや病気、それに伴う障害で生活全般への意欲を失いがち。作業療法士として経験を重ねた元田所長は「高齢者は“生きている”のではなく、“生かされている”のではないか。こんな実態を変えたかった」と言う。

朝 9 時過ぎ。メロンに着いた利用者はまず、血圧や脈拍を測定機で自ら測る。この日にやりたいリハビリやレクリエーションなど活動内容と併せて用紙に記入。施設側の一方的なサービス提供ではなく、自己決定を尊重するからだ。

体調チェックなどを終えると、測定や記入が自力でできた評価として、利用者は施設内通貨「メロン」を５つもらう。通貨を得るのは主体的な活動への“報酬”としてで、筋肉トレーニングなど専用機器を使ったリハビリならば１台に付き「５メロン」などと設定。一方で、楽に受けられるマッサージなどのサービスや娯楽には、通貨の支払いが必要、という仕組み。脳梗塞の後遺症で右半身にまひがある男性は（80）は必ず、リハビリ機器での運動を自らこなす。「メロンを稼ごうという意識からか、リハビリにも積極的になった」。得た通貨は、同施設のバザーで金券として使えるため「自分の稼ぎで家族にプレゼントできるのがうれしい」と、やる気につながっている。

熊本市植木町のショッピングプラザウエッキー２階に昨年 10 月、通所事業所として登場した「元気が出るデイサービスウエッキー」。特に介護予防や軽度の要介護者の機能回復を重視し、高齢者の生活支援につながるリハビリを実践している。

対象は介護予防が必要な「要支援」や、経度の「要介護１」「同２」と認定された高齢者。「メロン」と同様、リハビリやレクレーションのたびにやりとりされるのが、独自の施設内通貨「ウエッキー」。利用者には好評で、リハビリ後には稼いだ通貨を手にした高齢者がマージャンやゲームを楽しんでいる。

共同組合植木ショッピングプラザとくまもと健康支援研究所が共同設立した社団法人が運営。（中略）商業施設内にあるというメリットを生かし、施設内での買い物と歩行訓練を合わせた「買い物リハ」を取り入れるなどユニークだ。（中略）それぞれの利用者は、「３ヶ月後の孫の結婚式に着物で出席したい」「６ヶ月後には飼い犬と散歩したい」といった目標を設定した上で、実現につながるリハビリに取り組んでいる。

同研究所の松尾洋社長（36）は、一般にみられるデイサービスの現状について、「適切な介護予防サービスを提供できず、その結果、状態が悪くなる一方の高齢者を多く抱えている」と指摘。その上で、「高齢者の『できない』を手伝ったり、代わりにやってあげるという介護の在り方を変える必要がある」と投げかけている。

（「やる気引き出せば、お年寄りイキイキ＝「施設内通貨」使った工夫も」
熊本日日新聞　2011.2.19）